

## 熊野沖南海付加体 OOST における潜航調査 (YK02-02 報告)

## Submersible Observations of OOST in the Nankai Accretionary Prism off Kumano

# 氏家 恒太郎[1], Nankai-SEIZ

# Kohtaro Ujii[1], Nankai-SEIZ

[1] 海洋センター固体地球統合フロンティア

[1] IFREE, JAMSTEC

熊野沖南海付加体の out-of-sequence thrust (OOST) をターゲットに、「しんかい 6500」による潜航調査を行った。熊野沖 OOST は右横ずれ成分をもつ逆断層と考えられ、北東-南西方向のリッジが雁行状に配列する。リッジ南側の付加堆積物は、固結の進んでいない砂岩及び砂岩泥岩互層で主に構成され、リッジの方向とほぼ平行の一般走向を示し、北に中～高角度で傾斜する。また、リッジ南側では角礫化したシルト岩からなる断層帯が認められ、角礫表面には断層条線、鏡肌が観察される。せん断は網目状に発達する黒色薄層に集中しており、それ以外の部分は未変形である。同様の特徴をもつ断層帯は国際深海掘削によって室戸岬沖南海付加体でも報告されており、付加体前縁部での付加作用に起因していると考えられる。今回発見された断層が、付加体前縁部で形成されたのか、OOST に伴って形成されたのか現在までのところ定かではない。

リッジ北側ではシロウリガイなどの化学合成生物群集が複数地点で発見されており、断層あるいは透水性の良い層に沿った流体移動が示唆される。一方、リッジ南側では流体移動を示唆する積極的証拠に乏しく、主として崖すい堆積物に混じってシロウリガイの破片が散乱するのみである。このことは、熊野沖 OOST では流体の湧出が不均質であること、もしくはリッジ南側では OOST の活発な運動に伴う隆起によって地形が不安定となり崩落が卓越していることを反映していると考えられる。